

【研究発表】

見所断の睡眠はどのような構造を持っているのか

藤本 庸裕

説一切有部の九十八睡眠説は、阿含・ニカーヤの七睡眠説を幾分か改変し、欲界・色界・無色界の三界説と見苦所断・見集所断・見滅所断・見道所断・修所断という五つの分類に基づいて増廣し成立させたものである。その中、見所断の睡眠について、それがどのような基準によって編成され、どのような構造を持っているのか、九十八睡眠説の初期から存在したと考えられる無漏縁と有漏縁、遍行と非遍行という睡眠の枠組みを足掛かりにして検討する。

智雲撰『妙經文句私志記』と『法華文句記』——「處中」を中心に——

廣田 誠嗣

智雲（生没年不詳）は、唐代に活動した天台の學僧である。『妙經文句私志記』は、湛然（七一―七八二）の『法華文句記』を参照しながら、『法華文句』を註釋した著作であり、當時の學風を伝える貴重な資料と言える。しかしながら、『法華經』譬喻品第三の途中で註釋が途絶えていることもあり、十分な研究がなされたとは言い難い。本発表では、智雲が『法華文句』の特色である四種釋と、『法華經』の分科について、「處中」と表現していることに着目し、湛然説からの繼承と發展を明らかにしたい。

會澤正志齋における民心統合論の一考察

蔣 建偉

會澤正志齋（一七八二―一八六三）は後期水戸學を代表する思想家であり、その主著『新論』は幕末の志士にバイブル視され、尊王攘夷運動に大きな影響を與えた。當時の内憂外患に直面して、正志齋は「億兆心を一にする」こと、つまり民心統合を最も重要な課題とした。それでは、この民心統合はいかになされるのか、本発表では、正志齋の天皇の祭祀儀禮たる大嘗祭を通じて民心統合の構想について明らかにするとともに、その理論的支柱としての孝の思想について検討を加えたい。

仁齋學における實踐と反省

小池 直

伊藤仁齋は「日用」への徹底的な立脚を説いたが、かかる仁齋の姿勢は朱子學の側から「規範性の缺如」と指摘され、現在においても仁齋の「樂觀性」や「結果主義」を指摘する議論を惹起している。こうした議論に答えるには、仁齋が「自己完結した修養論」を危険視し、實踐とその反省という絶えざる試行錯誤によって初めて體系性を獲得する修養論を展開したことに注意を拂う必要がある。本発表では、仁齋學に於てこの試行錯誤が如何に各議論の前提となつているかを具體的に檢證する。

清澤滿之の淨土理解の推移について

Bernat MARTI-OROVAL

清澤滿之（一八六三―一九〇三）晩年の思想における淨土理解を象徴する説述として、「私共か地獄極樂かあるか故に地獄極樂を信するのではない、私共か地獄極樂を信する時、地獄極樂は私共に對して存在するのである」（『清澤滿之全集』卷六、二八四頁）という文がよく知られている。本発表では、清澤のそれより以前の思想、宗教哲學における淨土觀に焦點を絞り、解釋を試みる。それを分析、紹介した上で、改めて清澤晩年の淨土理解に視點を戻し、比較し、検討する。

鄭玄の『論語註』と何晏の『論語集解』

渡邊 義浩

何晏の『論語集解』は、鄭玄の『論語註』など八家の注を何晏の見識によりまとめたものである。『論語集解』は、そののち邢昺の『論語義疏』の底本となるなど、唐代までは残存していた鄭玄の『論語註』を抑えて、古注の中心となった。一方、鄭玄の『論語註』は、宋代には散逸したが、西域からの出土により約半数の篇が復原された。本報告は、何晏の『論語集解』が古注の中心となった理由を鄭玄の『論語註』と比較の中で検討すると共に、鄭玄の『論語註』の特徴を考察するものである。

【講演】

中國イスラーム哲學と道教

堀池 信夫

従来、中國イスラーム哲學にとっては新儒教との關聯が重視されてきた。その視點はもちろん最重要だが、實はもつとも初期にはイスラーム思想の説明に道教用語・概念が用いられた。その後、新儒教概念を自在に用いた中國イスラーム哲學の形成を経たのち、逆にイスラーム思想の側が道教思想を取り入れるという事態がおこった。イスラームが道教を取り入れる？ まさか！

疑いは當然である。

今回はその歴史的展開について、史上しばしば起こった思想・宗教的ピジンの一例として述べたいと思う。